湖畔にて　*by NED*

私は、はじめて男の睾丸を潰したときのことを、鮮明に記憶している。男の名前はラリー・スミス。私たちは、同じ高校の同級生だった。卑猥な、貧しい労働者たちの子供が通うヴァージニアの学校だった。もって生まれた天分は人それぞれであろうとも、私たちは実生活においてステレオタイプな生き方を強いられた。彼はウェイトリフティングをやり、ビールを飲み、酒場で喧嘩し、そしてオートバイをぶっとばす学生だった。

私は反抗的な娘で、学校でやることといったら、煙草を吸うこと、他の不良仲間とお喋りすること、教師をからかうこと、ときどき男の子を苛めること。私は、だらしない娘という評判だった。その評判は私を憤慨させた。私を淫売呼ばわりした連中に対して、私は激しく抗議し、困惑させた。結果として、私は別の評判をかち得た。気の強いメス犬。

ラリーは、手のつけられない暴れ者との評判を得ていた。彼は酒を飲むと好んで人を殴った。私たちはお似合いのカップルだったのかもしれない。

彼が初めて私に声をかけてきたのは、上級生になった春のことだった。私はお誘いを受けた。その頃の私は、切羽詰まったような、半分死んだようななげやりな、それでいて性的な快楽を激しく欲していた。

翌日、彼と私は学校をばっくれて、湖に出掛けた。そこは、夜になると子供たちが集まって、

酒を飲み、お喋りし、喧嘩し、セックスをする場所だった。何故、そんな場所に行ったのか、そこに行くことしか考えつかなかったからだが、昼間に行くには相応しくない場所だった。割れたグラス、酒瓶、ゴミ、スプレーでペイントした落書きがそこかしこに散らばっていた。道すがら、私たちは言葉少なかった。たいてい、彼が質問し、私の気を引こうとした。私は生意気な返事を返した。彼は、私が卑猥な言葉を吐くのを喜んでいるようだった。「おめえ、根性あるな」というのが彼の私についての評価だった。

私たちは、目的地についた。ロッキー半島にありがちな、砂と大きな石礫で出来た荒れ地。ボクシングのリングほどの広さの湖畔で、湖全体が見渡せたが、私たち以外には人影はなかった。

私は、セメントの壁のような大きな石に背をもたれかけ、湖を眺めた。水面から風が吹きつけていた。ラリーは私と並んで座った。そして私を見て、歯を剥きだしてにやりと笑った。彼は、タンクトップを着て彼の盛り上がった筋肉と胸毛を見せつけていた。膝に鉤裂きの出来たジーンズを履き、鈍色の皮のベルトを締めていた。彼は、私に顔を寄せ、またにやりと笑った。そして、私にキスをした。

私は思った。彼は、私が反抗的で人を見下した言い方をすることを気に入っていたように見えた。こういう時にも、彼は同じような反応を期待しているだろう。私は彼を振り払いこう言った。

「やめてよ」

彼は平然と言った。

「おい、よせよ」

そして、唇を私の顔に押しつけた。私は再び彼を振り払い、

「汚らしい馬鹿」

と罵った。本当のところ、私は彼を罵っていたが、この男のペニスを受け入れることを欲していたのだ。私は優しい愛撫より、荒々しいセックスを好んでいた。

「おい！」

彼は不平がましく、私の腕を振り払い、私の口に舌を入れようとした。嘘ではない、私は彼の乱暴な態度が好きだった。だが、もう一度、私が彼を押し返すと、彼は急におとなしくなってしまったのだ。私は、ちょっとリスキーな行為に及んだ。私は自分の膝小僧を彼の脚に押しつけ、股間に這わせた。優しく、睾丸をさすった。彼のペニスが太く勃起するのが感じられた。彼は私の右の乳房をつかみ、優しく揉んだ。私は、もっと乱暴なことをしてほしかったのだ！　私は手をのばし、彼の尻を撫で、強く爪を立てた。彼は困惑したようだった。彼はキスをやめた。

私はますます苛立った。もっと攻撃的に愛してほしかったのだ。私は両手で彼の尻を持ち上げた。彼が四つん這いのような恰好になったとき、下から膝小僧で彼の股間を強く蹴り上げた。

彼は悲鳴をあげ、よろめいた。呻きながら、私のほうにふらふらと這ってきた。と、彼は右手で私の顔を殴った。

「てめえ、どこ蹴りやがった！　このすべた！」

彼は罵った。私は、両手で顔を覆った。今度は右の乳房を殴った。つづいて左の乳房を殴った。そしてもう一度右の乳房……。乳房がちぎれるように痛かった。

その激痛が、私の淫らな欲望を消した。かわりに女を殴る卑怯者への激しい憤りが沸き起こった。私はすぐに我を取り戻した。彼がもう一度私の乳房を殴るために踏み込んで来たとき、私は彼の睾丸に、ロケットを打ち上げるように膝小僧をぶつけたのだ。

彼は悲鳴をあげた。さっきと違い金切り声だった。彼はがっくりと地面に膝をついた。私は、今度は彼の顔に膝蹴りを食わせた。彼は砂の上に仰向けに倒れた。彼の股が大きく開かれていた。私はダンスのステップを踏むように前に出て、すべての力を右足にこめて彼の睾丸を踏みつけた。彼は絶叫した。喘ぎ、肺が大きく上下した。私は彼の頭を三度蹴った。彼の頭から血が噴き出し、彼は泣きだした。

私の怒りは、この程度の責めでは収まらなかった。女の怒りは閉じ込められるものではない。吐き出さずにはおられないものだ。たいていの女はそうなのだ。ラリーが、そのちっぽけな脳味噌を守るために頭を手で庇っている間、私は彼のジーンズを脱がせた。彼はパンツをはいていなかった。私のなかに入るために、少しの手間も惜しんだのだろう。

彼の、太く長い二〇センチはありそうなペニスと、醜い大きな睾丸が目に入った。彼の男らしさの詰まった揺り籃、男性ホルモンの司令塔、男性能力を発揮する武器。私は彼の大きな固い睾丸をぎゅっと握りしめた。彼は錯乱したようにわめいたが、私は耳を貸さなかった。この睾丸を

つかまれているかぎり、彼はこの世でもっとも弱々しい生き物だった。私は、彼をどのようにも出来るのだ。私は、睾丸をひねりあげた。彼はエクソシストに出てくる少女のように反狂乱だった。彼はわめき、懇願した。でも私は握りしめ、ひねりあげ、引っ張った。彼の体が痙攣した。

私は、睾丸から手を離し、片手で彼のペニスを握りしめ、片手で彼のペニスを殴った。何度も何度も……十三回は殴っただろう。彼のペニスは傷つき、弱々しく萎びた。最後に私は拳を固め、大きく振り上げ、彼の右の睾丸に打ち込んだ。ラリーは泣きわめき、激痛に悶絶した。私は、彼が私の乳房にそうしたように、今度は左の睾丸を殴りつけた。そしてもう一度右の睾丸を。

私は起き上がり、彼の短く刈った髪の毛を引きむしるようにつかみ、彼の顔を殴った。そして、犬のように、彼の膝と手の上に座った。今から思うと、なぜあんなに熱くなったのか、なぜあんなにハイになったのか、自分でもわからない。ただ、私の頭は冴えていた。私の思考は曇りなく高ぶっていた。私は聖職者のように冷静に、かつ本能の命じるままに行動していた。私は、磨き上げた性能のいいマシンのように、この男を打ちのめそうとしていた。彼を完全に丸裸にし、霊的にも、精神的にも、肉体的にも、彼の男性としての能力を打ち砕こうとしていた。そして、彼の馬鹿げた考え、男性のほうが優位にあるという考えを粉みじんにしようとしていた。

彼を押さえつけながら、私は周囲を見回し、からっぽのビール瓶を見つけた。私はアイロニーを感じた。その瓶は、ラリーが夜中に酔っぱらって浮かれ騒ぎ、ここに放り投げておいたものかもしれないからだ。

私はラリーに言った。
「あんた、この湖で何人の女をレイプしたの？」
それから、彼の肛門にビール瓶を突っ込んだ。首の部分がずぶりと肛門に食い込んだ。ラリーは泣き叫んだ。体がぶるぶると震えていた。首の部分を全部突っ込むのは大変だったが、効果は覿面だった。その大部分が彼の肛門に埋まったとき、彼の括約筋が収縮し、ビール瓶はミサイルのようにぽんと飛び出した。私は、それを再び発射台に押し込んだ。力をこめて深く深く、彼のアヌスが瓶を完全に吸い込むまで押し込んだ。腸に達するまで埋め込むつもりだった。ラリーが抵抗をはじめた。私は再び睾丸を掴み、
「じっとしていないと、殺すよ」
と脅した。そして、女が男を苛むために神が造りたもうた二つの肉塊に爪を立てた。私は、ラリーを去勢する決心をしたのだ。
私はナイフを持っていなかったので、他の方法を考えた。そう難しいことではなかった。私は、私の拳と同じ大きさの石を拾い上げ、ラリーに向かって振り上げ、股を開けと命じた。ラリーはすすり泣いていた。涙と粘液で、顔がべとべとに濡れていた。
彼の男性能力の源である二つの果実を砕くための石を振り上げながら、私は宣告した。
「これは、お前が犯した女たちのために。これは、数分前に私をいたぶろうとした罪のために」
宣告を終え、私は力をこめて同時に二つの石を振りおろした。振り下ろした瞬間、私は両手に

激しい痛みを感じた。大きな音が湖じゅうに響いた。ラリーの睾丸は確実にぺしゃんこになったことが感じられた。
ラリーの体は二度、大きくねじ曲がり、野獣のような声が腹の底から吐き出された。彼が受けた苦痛と受難の蜜をたっぷりと味わうため、私は服を脱ぎ捨てた。彼の上に覆いかぶさり、私の陰門を彼の股間に押しつけた。そして、彼の頭を両手で挟んだ。彼の眼は飛び出しそうに見開かれていた。私は彼の口に唇を押しつけ舌をねじこんだ。彼が、さっきそうしたように。